資料１

第１回古賀市環境審議会生物多様性専門部会　協議結果

議題等	主な意見等	対応等
事務局案３ページ 「古賀を知ろう」	・河川の紹介がなく、さみしい。現在工事をしている上屋敷の親水公園にはなまずがおり、清滝川ランプの付近にはホタルがいるため、２カ所を追加してはどうか。	・ご意見のとおり修正。（資料１・２ページ）
	・上米多比は、ホタルが「神秘的に飛び交う」ような状況になく、両生類が生息している重要な場所である。	
	・西山の説明部分の“若宮町”は“宮若市”ではないか。	
事務局案８ページ 将来像について	・生きもの”については、動物や植物含めて、人間を除く生物を“生きもの“と呼ぶということで統一しておいてよいだろう。 ・“生きもの”には害獣も含むのではないか、害獣と共に生きるということは難しい場面もあるのではないか。 ・「害獣対人間」、「かわいいペット対人間」など、限定したイメージを持たせないような工夫がいる。 ・なるべくいろんな“生きもの“がいる社会をつくっていくという方向性は、戦略の中で打ち立てていく必要がある。 ・戦略策定の目的は生物多様性の保全だけでなく、究極には私たちの豊かな暮らし、持続可能な社会をつくるということだろう。そういう究極の目標を見据えて、“生きもの”をとらえる必要があり、害獣、外来種なども含めて、持続可能な社会、豊かな暮らしをつくっていくにはどうしたらいいかを考えていく必要がある。	・階層構造の枠を整理して、どの項目にどういった取組が盛りこまれるのかを整理し、将来像やキャッチフレーズを検討していく。 ・３章の骨子作成により、「3.「●●●●（将来像）」を実現するために」部分を修正。（資料１・３ページ）
	・関係性を表すのであれば、“つながり”などの表現を用い、“つながり”という言葉の中に“バランス”の意味合いを持たせるのはどうか。	
	・自然から頂く“恵み”という言葉を使うのは、日本的な表現だと思う。自然の恩恵をもらいつつも、外来生物などはコントロールしていくというイメージが入るといい。 ・“生きもの“にこだわらず、「自然から恵みをいただく」、「人と自然がともに生きる」などの表現であれば、共生ということに違和感がない。	
	・“育つ”という表現は、流動しながら育っていく、ずっと続いていくんだというイメージがあり、どう変わるかわからないけれども、育ち方をやめないという意味でも、とてもいい。	
	・事務局案の 3 つを合わせたような将来像ができればいいのではないかと思う。	

2．古賀を知ろう

古賀には、東側に犬鳴山地・立花山地という緑豊かな山々が広がっています。山から樹園地などに利用されてきた丘へ向かい、水田や畑地などのさと、まちを過ぎると、西側には白砂青松の美しい海岸線を有する海が広がっています。海に注ぎこむ、大根側水系と中川水系の２つの河川は、場所や季節によっていろんな風景を見せてくれます。

季節によって、一緒に見る人によって、見えるものも聞こえるものも変わってきます。どんな生きものがどんな場所で、どんな暮らしをしているのか、そっとのぞいてみませんか。

生きものがにぎわう場所① 古　賀　海　岸

白砂青松の美しい海岸には、多くの植物、魚、カニ、貝などが暮らしています。古賀の人たちが「残したい場所」としても選んでいます。

生きものがにぎわう場所② 大根川（下流）

山からさと、まちを流れてきた大根川の下流では、川の生き物と汽水を好む生き物が入り混じり、いろんな生きものに出会うことができます。

生きものがにぎわう場所③ 鹿　部　山

市街地に残る貴重な緑のスペースとして、自然を活かし遊歩道を整備した公園で、多くの市民に親しまれています。古賀の人たちが「残したい場所」としても選んでいます。

生きものがにぎわう場所④ 田んぼの水路

田んぼには様々な生きものが暮らしています。虫、魚。鳥・・・。季節によって様々な生きものを見ることができます。

生きものがにぎわう場所⑤ 古賀ダム周辺

なかなか入ることはできませんが、古賀ダムの周辺には魚や虫、植物など様々な生きものが暮らしています。

生きものがにぎわう場所⑥ 薬王寺水辺公園

農業用溜池の整備と併せて造られた公園で、周囲の山々、木立、野鳥のさえずりの中で緑と水に親しむことができる公園です。

生きものがにぎわう場所⑦ 上　米　多　比

四季折々の花が楽しめる興山園や、めずらしい両生類が暮らす不入谷（いらんたに）などがあり、自然豊かな地域です。

生きものがにぎわう場所⑧ 西　　山

古賀市の最高峰。標高 645m のこの山は宮若市との市境にあり、犬鳴山系の主峰で、多くの植物や虫が暮らしています。

生きものがにぎわう場所⑨ 千　鳥　ヶ　池

千鳥ヶ池の周回散策路、森林遊歩道などがあり、市民のくつろぎの場として親しまれていまが。実は、たくさんの珍しい生きものが暮らしています。古賀の人たちが「残したい場所」としても選んでいます。

生きものがにぎわう場所⑩ 大根川（上流）

ホタルの飛び交う季節には神秘的な光景を見ることができます。古賀市の人たちが「残したい場所」としても選んでいます。

2．戦略がめざしていく古賀の将来

高校生の描く「古賀の将来」、そこに込められた想いからも伝わるように、ただ生きものの住める環境を守らなければいけないのではなく、古賀が元気になりながら、私たち人間と生きものや自然とが共生し、生きものを支え、生きものに支えられるような社会をめざしていかなければなりません。

この戦略では、2033 年までに、古賀市全域でめざす「古賀の将来」を、「●●●●（将来像）」とし、様々な取組をすすめていきます。

候補①

第２次古賀市環境基本計画では、古賀市の環境を貴重な財産として未来へ引き継いでいくことをめざして「未来に引き継ごう　人が自然と愉しく共生する環のまち　古賀」を将来像に掲げている。人と自然が共生し、共生の「環」、共働の「環」、循環の「環」が広がる古賀になるイメージ。

将来像	人と自然が共に生きる 環のまち　古賀
キャッチフレーズ	自然と織りなす「環」のまちへ

候補②

人と生きものが共に生き、共に育っていくことで、豊かな自然もありながら、活気にあふれた古賀になるイメージ。

将来像	人と生きものが　共に育つまち
キャッチフレーズ	人と生きものが共に育つまちをめざして

候補③

人と人、人と生きものの環が広がることにより、生物多様性がより豊かに、また、持続可能となるイメージ。

将来像	古賀の環が生み出す 人と生もののつながり
キャッチフレーズ	生きものと共に。つながる未来へ・・・

3．「●●●●（将来像）」を実現するために

この戦略でめざす将来像は 2033 年の古賀の姿です。「生物多様性」の理想像である「生きものがバランスよく安定し、それが持続可能となる」社会の実現を考えると、とても長い時間が必要で、15 年間という期間は短く感じるかもしれません。

しかし、15 年後は今の高校生たちが大人になり、地域社会を担っていく年齢になる頃。きっと、私たちが暮らす古賀も今とは変化しているのではないでしょうか。

そのころ、確実に次世代にバトンタッチし、彼らのイメージする「古賀の将来」をめざしてもらいたい。また、そのバトンは、さらに次の世代へ。

バトンを確実につなぐため、私たちは責任を持って、次のアクションを起こします。

Action１．生物多様性を知る

古賀に関わるいろんな人に、生物多様性の大切さやもろさなどを知ってもらいます。

Action２．生物多様性を守る

多様な生きものが住みやすい環境を増やします。

Action３．生物多様性を活かす

生物多様性から受ける恵みをいつまでも活かしていきます。

Action４．人をつなぐ

人と人、人と地域などのつながりを深め、生きものと自然、人と自然へのつながりへ発展させていきます。